

10代少女の「バイブル」生む

6月9日、東京都新宿区内の寺で営まれた通夜。冷たい雨の中、200人は集まっただろうか。20〜40歳代の女性たちが大粒の涙をこぼし続ける。「10年以上前に書いた作品で、これだけファンに涙を流させるなんて」。葬儀委員長を務めた作家の菊地秀行さん(58)は驚いた。

北海道出身。札幌市の藤女子大学文学部在籍中の1977年に「さようならアルカノン」が、集英社の少女向け小説雑誌「小説ジュニア」(現・コバルト)の青春小説新人賞佳作に入選した。10代の少女の悩みを等身大で描いた作品は爆発的に売れ、現代に続くティーンズ小説の人気を確立した。なかでも、平安時代のおてんばなお姫様が活躍する「なんて素敵にジャパネスク」シリーズは84年から刊行され、800万部が売れた。

「活発な女の子が自分の人生を切り開いていく姿は、自分自身の夢の投影だったのかもしれない」。姉の木根利恵子さん(56)はこう振り返る。好奇心旺盛で豪胆な人物として知られるが、実家は堅実な鉄道マンの家庭。「結婚して子供を産むのが女性の幸せ」という母とは、ことある

ごとに衝突した。26歳で単身上京した後もいさかいは絶えなかった。テレビ番組の人生相談で、母親が勝手に結婚相談を持ちかけたことを知り、絶縁状を送ったことも。「歩み寄ろうと母親を旅行に誘い、途中でまた仲たがいで帰ってきた」と木根さんは苦笑いする。

母親とは正反対の価値観で描いた少女像は、時代の波に乗り、多くの女性読者の共感を呼んだ。大量のファンレターをさばっていたコバルトの元編集者は「人気小説の枠を超え、女性に生き方の選択肢を示してくれた」とみる。

「感情移入しやすい主人公を描くのがうまい」と言うのは、20年近いつきあいの菊地さんだ。おっちょこちょいで意地っ張りだが、情に厚い。まるで自分のクラスにもいそうな少女たち。「青春時代に

作品に出合った読者は、まるで友達と過ごすように登場人物と一緒に成長してきた。だからこそ氷室さんの死を身近に感じたのでは」

早すぎる死から約3か月。木根さんの元には、いまだにファンからの手紙や贈り物が届く。少女時代に親戚に預けられ、自分の居場所のなさに苦しんだという20歳代の女性からは「(読んでいると)つらい毎日が色あせるくらい、鮮やかな一時でした」「全てを忘れて楽しめる時間があつたから、私は乗り越えて生きてこれたのです」とつぶつてくれた。

母の望んだ結婚も出産も、ついに果たさなかった妹だが、代わりに多くのものを遺してくれた。「妹の生き方も一つの道だったと思う」(東京本社社会部 朝来野祥子)



1995年にコバルトの新人賞を選考した氷室さん—集英社提供